

「たびとしよCafe」 を 開催



荒山正彦（あらかやま・まさひこ）

専門は人文地理学、近代ツーリズムの文化史。
大阪大学大学院文学研究科博士後期課程を経て、現在は関西学院大学文学部教授。
近代期の旅行案内書55点を復刻出版した企画『シリーズ明治・大正の旅行案内書集成 全26巻』
（ゆまに書房、2013～2015年）の監修と解説執筆を行った。

2017年3月2日（木）、第8回「たびとしよCafe」を開催しました。ゲストスピーカーに関西学院大学文学部教授の荒山正彦氏をお迎えし、「近代日本における旅行案内書の歩み」というテーマでお話いただきました。当日は、大学や研究機関の研究者をはじめ、出版・マスコミ、運輸業、旅行業に携わる計27名の方にご参加いただきました。旅の図書館の書架に面した会場では、明治から昭和にかけて出

版された旅行案内書（旅の図書館所蔵）もあわせて展示し、参加者の皆さまにご覧いただきました。

【第1部】 ゲストスピーカーによる 話題提供

日本では近世においてすでにさまざまな旅行案内書が出版されており、明治期の近代を迎え、旅行スタイルの変

第1部のお話のポイント

● 徒歩での旅行がメインであった江戸時代は、街道図や街道沿いの名所、名物、宿場、距離などを記した「道中記」と、各地の名所を挿絵と文章であらわした「名所図会」とが、旅行案内書の役割を担っていた。明治初期から鉄道の敷設がはじまり、次第に全国各地に広がると、旅行の方法は徒歩から鉄道へと移り変わり、「道中記」に描かれる街道には鉄道が、宿場には鉄道駅が加わることとなった。そして「道中記」のスタイルを引き継ぐ形で「鉄道旅行案内書」が出版されるようになる。

● 初期の鉄道旅行案内書は山陽鉄道などの私鉄から出版されており、官営鉄道による鉄道旅行案内書は明治30年代後半に登場する。鉄道省によつて大正10（1921）年に初版が出版された『鉄道旅行案内』は、横帳形式で数ページおきに鉄道沿線の鳥瞰図が挿入されており、道中記や名所図会の特徴が最もよく継

化（徒歩から鉄道へ）や印刷技術の変
化（木版から銅版、石版、活版へ）な
どにより、旅行案内書そのものにもさ
まざまな様相がみられました。

今回は明治から戦前にかけての約70
年間に出版された旅行案内書に焦点を
当て、時代ごとに特徴的な旅行案内書
を例に挙げながら、日本独自の旅行案
内書のスタイルの形成過程を解説して
いただきました。

【第2部】 ゲストスピーカーとの 意見交換

参加者：仕事での旅行と娯楽での旅行
の比率はどれぐらいだったのか。また
満洲などへはどれぐらいの日本人が旅
行していたのか。

荒山氏：仕事での旅行と娯楽での旅行
の比率は、統計も残されておらず正確
にはわからないが、旅行案内書やポス
ター、絵がきなどが豊富に印刷出版
されていたことを考えれば、娯楽を目
的とする旅行もそれなりに多く行われ
ていたと思われる。また満洲などへの
旅行者の実数もわからないが、例えば、
昭和10（1935）年頃のジャパン・ツ

ーリスト・ビューローの資料を見ると、
1カ月に10から20ぐらいの学校が、修
学旅行で満洲を訪れている。満洲は、
朝鮮や台湾とともに国内旅行の延長線
上にある目的地でもあった。

参加者：当時の旅行案内書はどのくら
い印刷され、どういった方が購入して
どのような使われていたのか。

荒山氏：印刷部数については、旅行案
内書の奥付や社史に書いてあるもの以
外はわからないが、たとえば値段につ
いては、ある年代の『旅程と費用概
算』には、奥付に定価1円20銭ないし
は1円40銭と記されている。これは現
在の価格で2500円から3000円
ほどである。旅行案内書としては高い
と思われるかもしれないが、当時の書
籍の価格としては標準的であり、情報
量を考えると妥当であろう。利用者層
や利用方法については、想像はできて
も根拠が少ないので研究の対象にはな
りにくいと考えている。

参加者：日本のガイドブックはビジュ
アルが多く、海外のガイドブックは文
章が多いという特徴があると思うが、
そういった違いは近代ですでに表れて
いたのか。

荒山氏：旅行案内書が成立した時代背

承された形式になっている。このスタイ
ルは日本独特の鉄道旅行案内書であると
考えられる。

● 鉄道などの時刻表が単行本として出版
されるのは、明治27（1894）年からで
ある。戦前期の時刻表には、表題に「旅
行案内」と記されたものもあり、時刻表
のことを「旅行案内」と呼ぶ場合もあった。

● 昭和4（1929）年からは、鉄道省に
よって『日本案内記』全8巻が出版された。同書は日本を各地
方別に案内するもので、その質・量ともに近代における旅行
案内書の総決算であったと評価できる。そのほか鉄道省から
は、特定のテーマによる鉄道旅行案内書『温泉案内』『神まう
で』『お寺まわり』『郷土旅行叢書』などが出版された。

● 満洲や朝鮮、台湾といった外地と植民地の鉄道旅行案内書も、
日本語で数多く出版されているほか、日本郵船や大阪商船とい
った船舶会社からも世界各地への航路案内や世界一周旅行の案
内書などが出版された。

● 明治45（1912）年にジャパン・ツーリスト・ビューローが
設立され、翌年には雑誌『ツーリスト』が創刊された。また大
正9（1920）年から約20年間にわたり『旅程と費用概算』が
出版されるが、これは旅行目的地への交通手段とその費用や移
動時間に加え、旅程案が付いており、旅行斡旋を担う機関とし
ての特徴がよく表れている。『旅程と費用概算』は、当初は
100ページほどの小型本であったが、昭和10年代には
1000ページほどの分厚い本となる。そこで地域別に分割さ
れた『ツーリスト案内叢書』がおよそ全20巻出版された。この
『ツーリスト案内叢書』は、戦後の『旅行叢書』シリーズを経て、
『交通公社のポケッ
ト・ガイド』シリー
ズや『JTBのポケ
ット・ガイド』シリ
ーズへと継承された。



『旅程と費用概算』
ジャパン・ツーリスト・
ビューロー、
昭和5(1930)年



『鉄道旅行案内』
鉄道省、大正13(1924)年

景に影響されていると考えられる。たとえばヨーロッパでも古い旅行案内書のひとつは、1820年代にドイツで出版されたベデカー社によるものである。ベデカー社の旅行案内書はドイツ語をはじめ、英語、フランス語などで出版されているが、文字は小さく、またその内容はとても難しく、地図や挿絵に比べて文章の割合が高い。1830年代からイギリスで刊行がはじまるマレー社の旅行案内書も同様である。これらの旅行案内書は、教養旅行としてのグランドツアーの影響を強く受けており、内容はとてもアカデミックで、読みこなすにはかなりの知識と教養が求められる。

一方で、伝統的に日本の旅行案内書は挿絵が多用されている。これは近世の江戸や京都、大坂での識字率が高かったこと、つまり庶民も文字を読める場合が多かったこととも関係があると思われる。より多くの人が楽しめるように、平易な文章と挿絵が多用されたと考えられる。

参加者：今後の観光立国を盛り上げていくには、今日のお話にあがったような戦前の資料をもっと活用していく仕掛けを検討してもいいのではないか。

また大学で観光を学ぶ学生などにも教育すべきではないか。

荒山氏：おっしゃる通りだと思う。現時点では、観光に関する印刷出版物が、歴史的にどれぐらいあったのかを知る手がかりもあまりなく、もちろんリストなどもない。間違いなくその仕掛けが必要だと思う。また学生には、少なくとも自分の大学では旅行案内書の歴史を教えているが、実際の旅行案内書を見たり、卒業論文で利用するためには、所蔵側が資料の整理・公開をすすめる必要がある。ただ最近では、



復刻版やデジタルアーカイブも充実してきており、利用環境が改善しているのも事実である。

おわりに

ご参加いただいた皆様からは、「観光以外の分野からこういった研究がされていることは知らなかった」「日本人がどのように旅行先の情報を得ていたかという歴史がわかって大変有益だった」「観光史研究はこれからの研究テーマであると思うので注目したい」といった感想が寄せられました。

各時代の旅行案内書からは、日本人の旅行スタイルの変遷はもちろん、旅行需要拡大に向けた国の取り組み、ビジュアルが多い日本独特のガイドブックの形成過程など、さまざまなことが見えてきます。古書を見直すことで改めて発見できることも多く、今後の地域ないし国の観光政策を考えていく上でも多くのヒントが得られるのではないかと感じています。一方で、歴史研究から得たヒントをどのように今後活かすかという点については、なお研究の余地があるようです。



当館では、今年度から所蔵古書の概要把握と保存・活用に関する研究を進めてまいります。観光の研究や実務に古書を活用していただけるよう、書誌情報の整理などから着手していきたいと思えます。

(観光文化情報センター)

旅の図書館長 企画室長 福永香織